



👁️👁️ みどころ

むごたらしい少女殺人事件と、父親によるその復讐劇。『さまよう刃』（14年）をはじめとするその手の韓国映画は多いが、アラブとの血で血を洗う長年の抗争をくり広げているイスラエルで、イスラエル人監督がそんなテーマの映画をつくると・・・？

3匹のオオカミを主演に据えたストーリー展開は、あっと驚くシーンの連続。どれだけ拷問しても自白しないのは、きっと彼は無実だから……。多くの人がそう思うはずだが、さて本作ラストの映像は？こりゃ、一体どう理解すれば・・・？

何が正義で、何が悪？その答えが簡単ではないことは、このイスラエル映画を観ればよくわかるはずだ。平和でノ一天気な日本人はこんな映画からそんな当たり前のことをしっかり学びたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■韓国映画もすごい、イスラエル映画はもっとすごい！■□■

去る8月9日から11月まで、シネ・リーブル梅田とテアトル梅田で開催した「容赦なき韓国映画2014」で上映された韓国映画12作品では、『ソウォン／願い』（13年）（『シネマルーム33』145頁参照）、『テロ、ライブ』（13年）（『シネマルーム33』128頁参照）、『さまよう刃』（14年）（『シネマルーム33』未掲載）、『サスペクト 哀しき容疑者』（13年）（『シネマルーム33』235頁参照）、『レッド・ファミリー』（13年）（『シネマルーム33』227頁参照）、『悪魔は誰だ（MONTAGE）』（13年）等のすごさに圧倒された。これでは、近時の甘ったるく予定調和的な作りばかりの邦画が圧倒される

のは当然だ。そんな中、10月中旬のある日、浜村淳さんから「先生、『オオカミは嘘をつく』を観ましたか？あれはすごかったですよ」と言われたため、「こりゃ必見！」と思って劇場に行ったのが本作だ。予告編を数回観ただけでも、どんでん返しが連続するサイコ・サスペンスだと思っていたが、その予想はピタリ。最大のポイントは、本作はイスラエル映画だということだ。

国際政治に疎い多くの日本人でも、イスラエルとアラブ諸国が数年間にわたって抗争を続けていることは知っているはず。したがって、そこではテロや誘拐、攻撃とその報復は日常茶飯事で、暴力行為はもちろん、残忍かつ非人道的の行為もごく当たり前。日本では（特に朝日新聞系では？）「〇〇が正義で△△が悪」と決めつけた論評が多いが、サイコ・サスペンスの韓国映画を観ていると、そんな日本の常識は世界の非常識だということがよくわかる。しかして、イスラエル映画である本作に観るそのテイストは、鋭い問題提起にあふれているそれらの韓国映画以上だ。

アハロン・ケシャレスとナヴォット・パプシャドという2人のイスラエル人の若手監督の名前は本作ではじめて知ったが、デビュー作に続く2作目となる本作は、あのクエンティン・タランティーノ監督をして「これが今年のナンバーワンだ！」と言わしめたほどらしい。その2人は、パンフレットの「DIRECTOR'S INTERVIEW」で、「『イスラエル生まれ』であることを活かしつつ『善と悪』というテーマを追いかけていきたい」と述べている。日本では「善」ばかり教えて「悪」は教えないという風潮が蔓延しているが、やはりこんな映画を観て、徹底的に「善と悪」の両方を考察しなければ・・・。

■本作は3人（4人？）の主役で構成！その俳優たちは？■

近時の邦画は、若手イケメン男優にキレイどころの若手女優を配した布陣が目立つ。これは当然若いアベックの来館を期待したものだ。ハリウッド映画でも、ビッグネームを起用したアメコミ等、さかんに若い観客に媚を売る風潮が目立つ。そんな視点でみれば、そもそもイスラエル映画と聞いただけで馴染みがない。

本作の主役は、刑事のミッキ（リオール・アシュケナズィ）、殺された少女の父親ギディ（ツァヒ・グラッド）、連続少女殺人事件の容疑者とされた宗教学を教える中学教師ドロール（ロテム・ケイナン）の3人。また、後半からはギディの父親、つまり殺された少女の祖父であるヨラム（ドヴ・グリックマン）も加わり、地下室でのギディによるドロールへの拷問の数々がメイン（？）となる。したがって、本作は舞台劇にも流用できそうなキャストで構成されている。しかして、2人の若手監督のインタビューによると、リオール・アシュケナズィは大変人気のある映画スターで、“イスラエルのジョージ・クルーニー”、ツァヒ・グラッドは今ももっとも称賛されている舞台俳優の1人で、“イスラエルのダニエル・デイ・ルイス”、ドヴ・グリックマンは偉大な喜劇役者、“イスラエルのジョン・クリーズ”と呼ばれているらしい。もっとも、ロテム・ケイナンだけは長編映画出演は2作目

で、これが初の大役となった俳優らしい。そう説明されると、全然見たことも聞いたこともないイスラエル人の俳優にも少しは親しみが湧くのでは？

■□■原題VS邦題、この邦題には違和感が！■□■

本作の原題は『Big Bad Wolves』。“wolves”は“wolf”の複数形だから、直訳すれば「大きな悪いオオカミたち」だ。これが刑事（ミッキ）、父親（ギディ）、宗教学教師（ドロール）の3人（＝3匹のオオカミ）を指しているのは当然。つまり本作は、連続少女殺人事件の真犯人は誰だ？をテーマとしてミッキ、ギディ、ドロールの3人（＝3匹のオオカミ）の「生態」をあぶり出し、何が正義で、何が悪かを真正面から観客に問う、すごい映画なのだ。

そう考えると、『オオカミは嘘をつく』という邦題はちょっとピントはずれ。なぜなら、どんな善良な人間だって嘘をつくのは当たり前だから、邪悪で凶悪な存在の象徴とされているオオカミが嘘をつくのは当たり前。したがって、そんなタイトルにしたのでは、本作のエッセンスを何も物語ることにならないのでは・・・？

もっとも、パンフレットの1、2頁には、見開きで「本当の‘悪’は誰だ!？」とあり、「本当の‘悪’」に「オオカミ」をかぶらせている。しかし、私に言わせればこれも悪しき日本社会の典型で、正解はあらかじめわかっていることを前提としてその答えを求めるものになっているのでは？もっとも、最後に「!？」をつけていることによって、「正解は求めているのだ」という思いがこもっているのかも・・・？

■□■イスラエルでは「かくれんぼ」もできないの？■□■

「かくれんぼ（遊び）」は日本だけでなく世界中にあり、イスラエルにもあることが、本作冒頭のスローモーションを交えた美しいシークエンスを観ているとよくわかる。とりわけ、鬼役の男の子から隠れる2人の女の子の、青いワンピースと赤いワンピースが印象的だ。「かくれんぼ」のルールは万国共通のようで、鬼さんが数を数えている間に、青いワンピースの女の子は庭の土管の中に、赤いワンピースの女の子は廃屋の中に置き去りにされた箆笥の中に隠れたが、これはちょっと単純すぎたようだ。まず、青いワンピースの女の子が鬼に見つかり、次に箆笥の戸もすぐに開けられたが、何とそこには『グランド・イリュージョン』（13年）（『シネマルーム32』241頁参照）、『トリック 劇場版2』（06年）（『シネマルーム11』321頁参照）、『アイゼンハイム』（06年）（『シネマルーム20』96頁参照）で観た脱出マジックのように、女の子の赤い靴だけが残され、赤いワンピースの女の子は消えていたから、アレレ・・・。

韓国映画『さまよう刃』（14年）では、ビデオテープに残された女子中学生のスジンが廃屋の中に連れ込まれて3人の少年たちからレイプされ、挙句に殺害されるシーンが残忍で、父親の怒りと涙を誘ったが、本作では「連続少女殺人事件」といいながら、少女の殺害シーンは全く登場しない（『シネマルーム33』未掲載）。また、11月16日に観た『デ

『ビルズ・ノット』(13年)は「BASED ON A TRUE STORY」だったが、実際に3人の小児たちが殺されるシーンを見た者は誰もいないので、死体だけがそれぞれの手足を靴紐で縛られた状態で発見されたが、本作では女の子の死体もごく一部しかスクリーンには登場しない。もっとも、ミッキー刑事たちが森の奥で発見した少女の死体は、下着を足首まで下され、イスに括りつけられた状態で発見されたうえ、何とその体から首がなくなっていたというから、ビックリ。あの「かくれんぼ」で筆筒の中に隠れた赤いワンピースの女の子は、なぜこんなことに……。イスラエルでは、子供たちは「かくれんぼ遊び」もおちおちできないの……？



(C) 2013 Catch BBW the Film, Limited Partnership. All Rights Reserved. ※R-18

■赤ずきんちゃんにみるオオカミの怖さは？■

「赤ずきんちゃん」はグリム童話で有名だが、実はこれは怖〜いお話。その悪役がオオカミだ。オオカミはお使いに出た赤ずきんちゃんに道草をさせようえ、おばあさんの家に先回りをして、まずおばあさんを食べてしまったうえ、今度はおばあさんに化けて家に帰ってきた赤ずきんちゃんを食べてしまうことになる。グリム童話では、その後猟師が登場し、満腹になって寝ているオオカミの腹から2人を助け出し、赤ずきんちゃんは言いつけを守らなかった自分を悔い、反省することで「めでたし、めでたし……」というストーリーになっている。しかし、こんなキレイな教訓的な童話になる前は、オオカミの怖さだけが際立っていた民話だ。

他方、本作はモデルや原作は全くなく、すべてアハロン・ケシャレスとナヴオット・パプシャドが創り出したストーリーだが、そこに登場するオオカミの怖さは？1匹だけはオオカミと呼ぶに相応しいかどうか疑問で、むしろ赤ずきんちゃん的役割・・・？しかし、他の2匹のオオカミの怖さは十分。というより、そのオオカミ度のすごさが本作のインパクトになっているので、それに注目！

■■■本作にみる1匹目のオオカミは？■■■

本作に登場する1匹目のオオカミたるミッキ刑事は、『25 N I J Y U - G O』（14年）で観た桜井慎太郎刑事（哀川翔）以上の悪徳かつ暴力刑事。導入部に続いて、連続少女殺人事件の重要参考人とされているドロールを、ミッキ刑事が同僚のラミ刑事（メナシェ・ノイ）と共にチンピラを使って痛めつけるシーンが登場するから、それに注目。これは日本の警察では到底ありえない風景だ。さらに、アハロン・ケシャレスとナヴオット・パプシャドの脚本が面白いのは、そんな風景をこっそりビデオ撮影している男がおり、それが動画サイトで流されること。これによって、ミッキ刑事は警察署長（ドゥヴィール・ベネデック）から大目玉を食らったうえ、捜査から外されて交通課に移動させられたが、ここでも『25 N I J Y U - G O』と同じように、ミッキ刑事は執拗にドロールを追い回すからヒドイ。こりゃ赤ずきんちゃんの童話にみるオオカミ以上に悪質かつ凶暴だ。

そのうえ、ある日ミッキ刑事がスタンガンを持ってドロールを追い回した挙句、スタンガンで気絶させ、車のトランクに乗せて運んで行ったのは、とある森の奥。そこでドロールにスコップを持たせて「穴を掘れ」と命令した挙句、ドロールは拳銃で脅されながら、自白しなければ穴の中に埋められること確実という状況に追い込まれたからひどい。ちなみに、こんなミッキ刑事の「暴走」は、署長も黙認のうえのようだから、ここまでくるとイスラエル警察そのものが「オオカミの群れ」と言われても仕方ないのでは・・・。

■■■ひょっとして、これが2匹目のオオカミ？■■■

本作導入部では、とにかくミッキ刑事の暴走ぶりが目立っている。『25 N I J Y U - G O』でも桜井慎太郎刑事と日影光一（寺島進）の暴走ぶりが導入部のハナだったが、ここでは同時に一種のユーモアもあった。しかし、本作には一切そんなものはないから、緊張の連続だ。ところが、その展開の中でも時々ドロールを追うミッキ刑事の動きを遠くから望遠レンズで撮影している中年男ギディがいるから、観客は「この男は一体誰？」と注目さざるをえない。

ロシアンルーレット風にドロールを脅かすミッキ刑事の拳銃の中に入っている弾は、最初1発だったが、2発、3発と増えていったから、ドロールがそのままシラを切れれば、いよいよ弾が命中！そんな状況下、突如ギディがミッキ刑事の後ろに現れて、ミッキ刑事をスコップで殴りつけてくれたから、ドロールは、やれやれ。そして、「あなたは誰ですか？」

と尋ねると、「内務班の者だ」と言われたからドロールはさらに一安心。ところが、ところが・・・？その直後ギディはドロールの頭をスコップで殴り倒したから、私もビックリ。この男は一体ダレ？ひょっとして、これが2匹目のオオカミ？

■□■ 2匹目のオオカミのオオカミ度は？地下室での拷問は？ ■□■

気絶していたドロールが目覚めたのは、森の奥深くの一軒家の地下室の中。身体はイスに縛られ、すぐ近くには『ソウ』シリーズでお馴染み(?)のベンチ等々の責め道具が・・・。

他方、ミッキ刑事もドロールと別の場所で目を覚ましたが、そこでギディが被害者の少女の父親であることを明かされたうえ、「この場で殺す」という案を含めて、A案、B案、C案を示されたから、ミッキ刑事が2人で共犯となってドロールの自白を引き出すという案を選んだのは当然だ。子供を殺された被害者の父親が復讐鬼となって犯人を追いつめるというストーリーは『さまよう刃』も同じだったが、ギディの場合は、感情をほとんど見せず、ただ黙々と復讐計画を進めていくオオカミだけに、その怖さはミッキ刑事のオオカミ度以上だ。

ちなみに、後半から登場してくるギディの父親、すなわち被害者の祖父たるヨラムは、元イスラエル軍の軍人だったそうだが、ギディもそうらしい。ドロールとともに監禁されてしまったミッキ刑事はギディの父親が登場してきた時点では、父親が息子の暴走を止めてくれるのでは？と期待したはずだ。ところが、何とヨラムはギディ以上のオオカミで、「もう火攻めは試したのか？他の動物同様、人間が最も恐れるのは火だ」と言いながら、バーナーの火でドロールの胸を焼いていくから、さすが元イスラエルの軍人はすごい。『ソウ』シリーズのスプラッター度もすごかったが、本作中盤にみる、手の指を折り、足の爪をペンチで剥がし、胸をバーナーで焼くシーンには思わずゾーっ。

■□■ 本作にみる3匹目のオオカミは？ ■□■

殺された少女の父親・ギディが犯人に復讐したい気持ちはよくわかる。しかし、ストーリーが進行するにつれて、容疑者とされ、ミッキ刑事からもギディからも自白を強要されているドロールにも娘がいることがわかるし、刑事のミッキにも娘がいることがわかる。どこの家庭でも、小さな娘の送り迎えは父親の役割と決まっている(?)が、ミッキ刑事は全然家庭的とは思えないうえ、どうやら時々その任務を忘れてしまうようだから、ある意味で父親失格・・・？それはギディも同じで、拷問中にみるギディの「独白」によれば、ギディが娘を迎えに行けなかったのは、職場で愛人と「あるセックス」をしている最中だったためだったらしい。

それに対して、ミッキ刑事が尾行を続けている中でわかったのは、ドロールは家庭のゴミ出しはするし、足の悪いおばあさんに付き添って道路を横断してあげるなど、およそ連続殺人犯の犯人とは思えない優しさを持っていること。さらに、ドロールは娘にも優しい

ようで、誕生日にはちゃんとケーキを買い、誕生日祝いもしているようだから、ミッキ刑事やギディに比べればよほどいい父親・・・？このように、学校での授業風景を含めて、そんなドロールが冒頭から一貫していくら痛めつけられても頑強に「犯人は自分ではない。何かのまちがいだ」とくり返している姿をみれば、ひょっとしてドロールはホントにやっていないのでは・・・？多くの観客はストーリーの進行につれて次第にそう思ってくるはずだ。したがって、そんなドロールを3匹目のオオカミと呼ぶのはいかにも不自然かつ不当(?)で、ドロールはむしろ赤ずきんちゃんの役割かもしれないが、さてアハロン・ケシャレスとナヴォット・パプシャドの脚本は？そして、本作ラストにみる、あつと驚くシーンとは・・・？

「DIRECTOR'S INTERVIEW」で、2人は「では最後に。ラストシーン、あの女の子の結末は？生きてたのでしょうか、それとも・・・？」との質問に対して、「それは教えられませんね。決して。」と答えている。さて、あなたの見解は・・・？

■□■本作では(も?)、ケータイが重要な小道具に! ■□■

身代金目的の誘拐をテーマとした『コール』(02年)は、30分毎にケータイからかかってくる「コール」による、3つの場所、3人の誘拐犯、3人の人質がポイントだった(『シネマルーム4』96頁参照)。したがって、そこではダコタ・ファニングとシャーリーズ・セロンと共に、いやそれ以上にケータイが主役だった。ことほど左様に、最近の映画はケータイが重要な役割を果たすことが多いが、それは本作も同じだ。

アハロン・ケシャレスとナヴォット・パプシャドの2人のアイデアによって練られた本作の脚本は、近時のわかりやすい邦画と違っていろいろとヒネッてあるので、人物像やストーリー展開は見えにくい。日経新聞11月28日の「シネマ万華鏡」の本作の評論では、「バイオレンス描写はど迫力だが、展開が説得力に欠ける」とあり、星2つという低評価にとどまったのは、きっとそのためだろう。しかし、私に言わせればなかなか理解しにくい導入部から中盤までのストーリー展開をつなぐガギが、3匹のオオカミがもつケータイ。つまり、三者三様のケータイでの会話がナレーションがわりとして大いにストーリーの理解に役立つことになるわけだ。とりわけ、ギディから執拗に拷問を受けているドロールは、母親からギディにかかってくるケータイに感謝すべきだ。なぜなら、ギディは母親から「ケータイにはちゃんと出なさい」と言われているため、それによって度々拷問が中断されるという「恩恵」を受けているからだ。

導入部に観るミッキ刑事とチンピラ等によるドロールへの「尋問」(?)のシーンでも、署長からミッキにかかってくるケータイを適当にごまかしていることが動画を見ればハッキリわかるから、ギディは言い逃れができなくなっている。このようなケータイがストーリーを牽引していく脚本に馴れてくると、本作中盤に突然ギディの父親ヨラムが一軒家を訪問してきたのは逆に意外に感じてしまう。ちなみに、ヨラムもギディと同じように妻(つ

まりギディの母親) からかかってくるケータイがちょっとしたストーリー展開の「小休止」となるのでそれも楽しみたい。

そして極めつけは、ラスト近くに、ミッキ刑事のケータイに妻からかかってくる電話。そこでは、ミッキ刑事の娘のことが告げられたが、さてその意味するものは・・・？

■□■「馬の男」をどう理解すれば・・・？■□■

私は都市問題をライフワークとしてきたが、その中核となるのは不動産法。したがって、1980年代に日本に発生した土地バブルは大きな勉強テーマだった。今の日本は北海道の観光地だけではなく、銀座の都心部でも中国の富裕層による土地の買い占め問題が発生しているが、それと同じように(？)、「近くにアラブ人が大勢いる危険な場所」でイスラエル人が土地、建物を買うのはかなりのリスクがあるらしい。本作には紅一点として不動産仲介業者の女性エティ(ナティ・クルーゲル)が一瞬だけ登場するが、彼女が仲介してギディに売ったのが、地下室にいくら呼んでも声が外に届かない「拷問部屋」を備え付けてある森の奥深くにある一軒家だ。私は弁護士として土地建物の売買契約書を作成するとともに現地での立会いに何度も同行したが、本作でギディとエティが売買契約のために現地で打合せをしている姿をみると、思わず背筋がゾーっとなってくる。そんな「現地調査」のうえでギディはこの一軒家を購入したのだから、その地下室が拷問部屋に適していることは実証済みだ。

たった1つの問題は、この土地建物が「近くにアラブ人が大勢いる危険な場所」にあること。母親はギディの引っ越し先をさかんに心配していたのに、なぜギディはそれを無視してそんな危険な地域にある物件を選んでしまったの？ギディの父親がわざわざやってきたのも、それを心配してのことらしい。イスラエルとアラブが政治的、軍事的、宗教的に対立していることはよく知られているが、不動産を購入するについてまでそんな問題があることを、日本人はほとんど知らないはずだ。したがって、本作に登場する「馬の男」(カイス・ナシェブ)の意味についてほとんどの日本人はわからないのでは・・・？

「馬の男」の登場は2度ある。1度目はギディが家の外でイスに腰かけて紙巻タバコをつくっている時。そこにフラリと馬にまたがった男が登場したから、ギディはビックリ。そこでの会話は、「タバコを1本くれ」というだけだったから、コトなきを得たが、さてこのシーンをどう理解すれば・・・？2度目はドロールとミッキ刑事の共同作戦(？)によってミッキ刑事だけが地下室から自転車に乗って逃げ出し、警察の応援を頼もうとしている時。バツリ交差点で「馬の男」と遭遇した時だ。そこでもミッキ刑事は驚きながらも、「馬の男」からケータイを借りることができたからラッキーだったが、さてこの「馬の男」をどう理解すれば・・・？

2014(平成26)年12月1日記